しまなみ農業だより

たまみの初結実にむけた今後の管理について

昨年度産のたまみ果実は、当初から苗木初結実による品質不良果の混入を懸念しておりましたが、群状結果と各生産者の家庭選別が効奏して極端な大玉不良果も無く、テスト販売を行った北関東のデパートでは、他の柑橘類が苦戦する中でたまみの評判は上々であったようです。

今年も結実予定なのは昨年度の未結実樹ですから、今年度が初結実となります。今年も昨年と同様群状結果による中玉生産を目指しますが、若干注意しなければならない点があります。

結実樹は主枝先端部を早めに摘果

まだまだ苗木を太らせることに主眼を置かねばなりません。主枝・亜主枝候補の先端部は充実した幼果がよく着生しますが、この果実を太らせてしまうと樹の生育が停止してしまうので、ここは早めに全摘果し、必ず葉のみにしておくことです。枝筋を良く観察して、樹冠の上3分の1程度を目安に行いましょう。

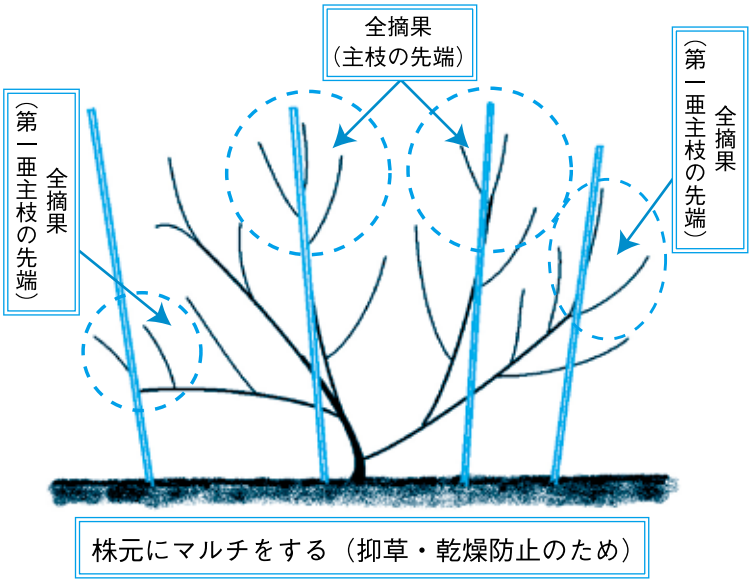
樹勢低下樹は無理をせず早めに全摘果

昨年は7月20日過ぎまで良く降雨がありましたが、それ以降は一転して晴天が続き、お盆の頃には乾燥のストレスがかかり始めていました。9月に入ってからかん水をしてもなかなか樹勢が戻らず、果実肥大が停止して2S以下止まりとなったり、著しい樹勢低果樹では枯れてしまったものも見られました。今年の夏季以降の降雨の状況は予想できませんが、昨年同様乾燥が続くようなら早めにかん水を始め、新葉発生の少ない樹などで旧葉の黄化など樹勢低下の兆候が見られた場合は、無理をせず早めに全摘果する等して樹勢回復に努めてください。

昨年度結実樹は樹勢回復に努める

昨年度の結実樹は今年ほとんど結実が見られないと思います。さらに樹によっては発芽しても葉色がなかなか戻らないものも見うけられます。本年は施肥・かん水をたっぷりと行って樹勢回復に努めてください。新葉へはモスピラン等の散布をたびたび行い、エカキムシ、アブラムシ等の被害にあわないよう気をつけてください。今年の発育枝が来年の結果母枝となります。

株元の除草・保水のためのマルチを行う

苗木の育成でもっとも肝心なことは苗木を良く太らせること、そのために必要なことは水分の確保です。かん水も必要ですが水分を与えると苗木が太る前に良く雑草が発生し、これを放置すると水分を草の方にとられてしまって苗木の生育が著しく阻害されます。ワラやカヤの敷込みが可能であるなら実施しておくと、雑草の発生を抑えることができます。これらの資材が入手できないなら、最も安い黒ポリマルチで株元を覆っておくことで抑草と乾燥防止効果が期待できます。除草のため管理機で株元近くの表土を混ぜるのは、表層に近い根を切ってしまう恐れがあることと土壌の乾燥を促進してしまうことから、苗木園の管理としてはあまりお勧めできません。

先月号では冷夏の予想をしてしまいましたが、逆に暑い夏となった場合、苗木管理の面では大変ですが、今年もおいしいたまみ果実を届けるためにがんばってください。